

編集部=文
text by Kotonone
信澤邦彦=写真
photograph by Kunihiro Nobusawa



ユニクロの星。

特集
1

就労事例ルポ

田巻英士君が、
「バックルームのエース」に
なるまで。

今からお話するのは、
ある障害者が仕事を得て、
職場で輝く「星」になるまでの物語。

自分に、何ができるのか。
自分には、何が向いているのか。

自分は、何者か。
仕事を探し、働くこととする時、

誰もが向き合うことになるそんな問いに、
田巻英士君も向き合い、
そしてその問いを乗り越えようとしている。

働くって、こういうことだ。

働くよるこびって、ここにあったんだ。



★朝ご飯は、
いつも少なめ

三月三〇日。くもり。四月中旬の暖かき。時刻は午前七時少し前。東京・町田市の田巻家は朝食の時間。やわらかな光がさし込むダイニングテーブルに、スクランブルエッグ、野菜、お味噌汁。田巻英士君のお椀に盛られたご飯は、ほんの少し、一口分だ。「緊張するとお腹が痛くなるので、いつも朝ご飯は少なめなんです。でも今日は取材があるから、いつもより、もうちょっと少ないかな」とお母さん。「飲み物がほしいな」という田巻君に、オレンジジュースを渡す。

お父さんは、朝食を食べ、そのままダイニングに座ってシェーバーでひげをあたっている。田巻君もすぐに食べ終え、お皿を持って台所へ。自分の食器は自分で洗って片付ける。歯を磨き、二階に上がってかばんを用意したら出発だ。あ、その前にお母さんが作ってくれたお弁当を忘れないようにしないと。お弁当はいつもお母さんが作ってくれる。最近は田巻君も週一回、自分で作るようになった。

★デミオに乗って、
行ってきます

七時一五分。「行ってきますーす」。玄関を出て、通りを挟んだ向かいの駐車場へ。愛車デミオに乗って自宅から一〇キロほど離れた、ユニコロ横浜都岡店へ向かう。国道一六号線はいつも渋滞。だから抜け道を使う。車好きのお父さんの熱心な指導のせい、田巻君のハンドルさばきは、まるで自動車教習所の教官みたいに正確で安定している。ハンドルを握りながら「お母さんは心配してたけど運転に不安はないです。あ、一度だけ台風が来た時は怖かったけど」と笑う。



★掃除の場所が
二カ所に増えた

八時二〇分。ユニコロ横浜都岡店に到着。駐車場の奥のほうに車を停めると、先輩の斎藤さんもちょうど車を降りるところ。「おはようー」「おはようーございます」。一緒に店の中へ。さあ、今日も忙しい一日が始まる。

八時三〇分。入社してすぐ、田巻君はほうきとちりとりを持って店の外へ。建物外にあるトイレと店の周り、そして広い駐車場の掃除が田巻君の担当だ。入社したばかりの頃、掃除の段取りを覚えるのは大変だった。「竹内さんに掃除の手順を書いたカードを作ってもらって、必死で覚えられました」と田巻君。「竹内さん」とは、田巻君を支え、ユニコロの就労を支援してくれた社会福祉法人ウイズ町田就労支援センター「らいむ」の職員、竹内広美さんのこと。

★心地良い疲れと
明るい表情と

田巻君の車を通りまで見送ったお父さんとお母さん。お父さんは「おかげさまで毎日楽しんで通っています。仕事から帰ってきて話を聞いていても、飽きてきたとか疲れたとか、愚痴や泣き言は一切言わないですから」。「体の疲れはあると思うんです。でもそれは気持ちいい疲れなんです。そうですね。学校にいた時とは全然違って表情が明るい」と、お母さんもあたたかく息子を見守る。

田巻君がユニコロ横浜都岡店に勤務してもう二年目。この光景は田巻家にとって、おなじみの「いつもの朝」だ。でもそうなるまでには、紆余曲折があった。お父さんもお母さんも、もちろん田巻君も。「戸惑いながら、時に苦しい思いもして、今の充実を手に入れている。

はほうきとちりとりを持って店の外へ。建物外にあるトイレと店の周り、そして広い駐車場の掃除が田巻君の担当だ。入社したばかりの頃、掃除の段取りを覚えるのは大変だった。「竹内さんに掃除の手順を書いたカードを作ってもらって、必死で覚えられました」と田巻君。「竹内さん」とは、田巻君を支え、ユニコロの就労を支援してくれた社会福祉法人ウイズ町田就労支援センター「らいむ」の職員、竹内広美さんのこと。「らいむ」の職員、竹内広美さんのこと。手順のカードを作ってくれただけではなく、状況の変化に対応することが苦手な田巻君のため、ローテーションだった掃除当番を、田巻君だけは固定にしてもらうように掛けあってくれたり、他のスタッフと田巻君とのコミュニケーションのきっかけづくりをしてくれたりと、「ジョブコーチ」として田巻君が職場環境に慣れるためのサポートをしてくれた。今では掃除にもすっかり慣れた田巻君。「掃除の場所も、外だけじゃなくもう一カ所、店内の床のモップと掃

除機がけをするようになったんですよ」と笑う。

★「必要な我慢」か、
「親のエゴ」か

両親が、田巻君の障害特性をはつきり意識したのは、小学校の時だった。「成長が遅いことはわかっていました。でも、学年が上がるにつれて学習や集団生活の中で難しい場面が増えてきました。それで、六年生の時に『LD協会』

に相談に行きました」とお母さん。LD（学習障害）との判定を受けたものの、小・中学校は普通学級に通い、高校は「サポート校」と呼ばれる、学習支援を行う普通科に通った。「親としては、ちよつと歩みは遅いけど『普通』の世界で一生懸命進んでいってもらいたいという思いがありました」とお母さん。「あとから考えれば、親のエゴとか見栄、ということになるんでしょうね」と振り返る。

人生って、いいことばかりじゃない。時



父・真さん、母・いづみさんと。

には、ぐっと我慢しなければならぬこともある。それが成長や変化につながると信じる。まして「人と違う特性」を持つていとされるわが子のことと思えばこそ、期待もし、その裏返しとして厳しいことも言う。それを「エゴ」の一言では片付けられないだろうとも思う。しかしいずれにせよ、高校卒業時に田巻家が下した決断は、結果的に田巻君を苦しめることになってしまった。

★ 苦しかった ★ 専門学校時代

「卒業後、自動車整備士の専門学校に行くことを勧めたのは私なんです」とお父さん。「私が車好きだったので、息子にもあつてほしいんじゃないかと思って」。簡単な整備くらいはできるというお父さん。息子にもできるの

は、という期待の裏側には、自立への願いがあつた。「芸は身を助ける、じゃないけど、やっぱり何か技術を身につけてほしい、と思ったんです」。人とのやり取りに課題を抱えていた田巻君。コミュニケーション能力を要求されない技能を身につけることができれば。そんな思いからの決断だつた。

しかし、健常者と同じスピードやテクニックで複雑な整備の工程を理解し、作業することは田巻君にとって非常に難

専門学校を辞めることを決断した。そして田巻君は、もう一つ大きな決断をする。障害者手帳の取得だ。

★ 袋剥きの ★ スピードスター

「田巻くん、袋剥きはいいから、先に蛍光灯の掃除、やつちやおうか」。斎藤さんからの指示で突然の作業変更。本来なら掃除の後には「袋剥き」の作業が田巻君の仕事だつた。しかし斎藤さんの判断で、汚れていたトイレの蛍光灯カバーの清掃を先に済ませようということになった。

田巻君は臨機応変に対応する。すぐに雑巾を持って先ほど清掃した建物外トイレへ。拭き掃除を済ませると店内にとんぼがえり。先に別のスタッフがやっていた袋剥き作業をサポート。田巻君が入ったとたん、明らかにぐん、とスピードが上がつた。袋剥きは、ダンボールから出した商品を店舗に陳列できる状態にするために、ビニール袋から取り出し、薄紙やピンを取ってサイズ順に並べ直す作業だ。商品によって異なるピンや薄紙のあり、なしを全てわかっているかのようにスムーズに作業していく。

★ 「うちの世界」への ★ 出会い

「あと五分で終わります」。作業完了の見込みを伝える声も自信たっぷりだ。もともとは数字を扱うことや、時間に追われることが苦手だと思っていたが、全くそんな印象はない。むしろ他の誰よりも自信を持って作業をし、見込みを立て、それを伝えている。

障害者手帳の取得は、専門学校の件をLD協会に相談しているとき、担当の先生から勧められた。「正直言って抵抗はありました。どうにかならないかと思つて、他の職業訓練校のようなところを見に行ったり。今まで『普通』に生きてほしいと思つてやってきました。手帳を取つたらうち（障害者）の世界に切り替えていかな

しつた。「学校では、決まった時間の中でどれだけきちんとできるのかを常に求められました。英士は『何分でもやれ』と言われると、パニックになつてしまつて、逆に何もできなくなつてしまいます」とお父さん。例えばタイヤを外してもう一回組み立てる。そんな工程でも田巻君は人一倍時間がかかる。健常者と常に比較される状況の中の作業は、大きなプレッシャーとなつてのしかかる。

★ 大きな決断。 ★ 障害者手帳取得

何よりもお母さんは、田巻君の顔から表情が消えてしまつたことを恐れた。「顔が暗い。表情がどんどんこわばつていくのがわかりました。つらいんだけど、優しい子だから親の期待を感じてがんばつちゃうんです。でも無理をしているから、それが顔や体に出してしまう」。このままでは田巻君は「壊れて」しまう。そう思つて先生に相談した。「車の整備は、人の命を預かる仕事。正確さとスピードが求められます。一生懸命やっているのはわかるけれど、仕事として考えるのは難しいのではないかと、言われました」。やはり続けることは無理だ。一年で



★田巻君は「できる子」

「らいむ」の竹内さんは、田巻君との初対面をこう振り返る。「とっても素直だし明るい。『できる子』だなってすぐ思いました」。

障害者の就労支援のプロとして実績を積み重ねる竹内さんは、両親や田巻君自身とは異なる視点で、田巻君のいいところを見つけていた。「就労という観点からは、挨拶がきちんとできること、約束が守れること、この二つが大事。田巻君は二つともできていたから、きつと就労はうまくいくだろうと思えました」。

ただし竹内さんは、田巻君には、就労活動に入る前に実績を積んでもらいたいと考えた。「面接を受けるときに、在宅からいきなり面接を受ける人と、就職のために準備を重ねた実績のある人だったら、同じレベルであれば実績のある人が採用されると思うんです。そこで、竹内さんは田巻君に「らいむ」が所属する「社会福祉法人ウイズ町田」で運営している就労移行支援事業所「美空」で就労移行をする」と勧めた。川崎市の北部市場で野菜

かと思われた。しかし実習から本採用まで時間が空いたため、持ち前の自信のなさから、田巻君の心に不安が広がってしまった。「もう行かない」って英士が言い始めた時、私はどうしようかと思ったんです」とお母さんは振り返る。「今まで、親の意向を強く出していろいろあつて、専門学校を辞めて、(障害者)手帳をとって、という今の道を選んだ。親としてはユクロでがんばってほしいと思うけど、それを英士に今強く言うことが果たしていいことなのか。すごく迷いました」。

行かない、という田巻君とお母さんは、竹内さんを交えて「らいむ」で話し合った。田巻君が席を外した時、竹内さんはお母さんに「大丈夫だから、しっかり背中を押してあげて」と伝えた。「竹内さんがそう言うてくれたから」とにかく行ってみたらと強く言うことができたんです。竹内さんは「環境に馴染んだら、田巻君は絶対にうまくやれる」と思っていました。職場の環境作りは、私がジョブコーチに入れば、できちゃうことですから」と言う。

や果物のパッケージや袋詰め、仕分けの仕事。それまで目指していた自動車整備士とはまるで違う世界。しかし田巻君は前向きに仕事に取り組んだ。「車の整備とは全然違っていたけど、今までが複雑すぎたんで、一旦切り替えて軽い作業から始めて、だんだんレベルアップしていけばいいかなって」。その背景には「この先働いていかないと自分でもやばいな、つて意識があつて」という田巻君の危機感があつた。「とりあえず自分でお金を稼ぐことを学んでいかないと」。

★転機になった「美空」での体験

気持ち切り替えて臨んだ「美空」での就労移行は、田巻君にとって転機となった。「美空」でやっていたことは自分に合っていたみたいですが。整備士の専門学校と同じで時間には厳しかったんだけど、仕事の内容は楽だったんで、パニックになることもなくて。仕事の負担が減った分、気持ちに余裕が生まれた。余裕が生まれると、周りがよく見えるようになった。周りの人たちとコミュニケーションを取れるようになった。「職員の方ともよく話しました」。

★二人三脚で支えあつて

「親が一番近くで子どものことを見ていて、というけれど、それだけにわからないこともある。英士に何ができるのか、どんなことに向いているのか、わかっているようで全然わかっていなかったとお父さんもお母さんも口をそろえる。そう、田巻君がユクロに「自分の場所」を見つけるためには、本人の努力がベースになるのはもちろんのことだが、親と経験豊富な第三者による「二人三脚」が不可欠だった。

そして二〇〇九年九月、田巻君はユクロに入社。その後の活躍は前述のとおりだ。「一番大きく変わったのは、本当に心からの笑顔になったことなんです」とお母さん。もともと田巻君は小さい頃は笑顔が魅力の「癒し系」だったという。それがいつの頃からか笑みが消え、こわばった、表情のない顔で日々を過ごすようになってしまった。「周りの人に支えられ、励まされて自信がついてきた。自信があるから、笑顔も変わったと思う」とお母さん。

一緒に働いている仲間にはいろんな人がいたんだけど、みんなよく話しかけてきてくれました」と田巻君。「二つのグループに分かれて作業するんですけど、自分たちのグループが早く終わったら、隣を手伝ってあげたりとか、時間のあるときに新しい機械を使わせてもらったりとか。新しい世界に入ると不安があつたのですが『美空』での経験は僕にとって自信になりました」。

★ユニコロでの実習に参加

「美空」で働きはじめて二カ月ほど過ぎた頃、竹内さんがユニコロに応募しなかつた。竹内さんがユニコロに応募しなかつたのは、二店舗で雇用実績がありました。仕事内容や職場環境などある程度はわかつていた。田巻君のコミュニケーション能力があれば大丈夫だと思えました」と竹内さん。

一方の田巻君、少し戸惑いもあつたよう。「最初は自分に合うのかがわからなくて。ユクロみたいな大きな会社で働く『普通の人たち』とうまくやっていけるのか。無理だろう」って思っていました。でも竹内さんもお母さんも勧める

ので、実習だけは行ってみようか、と思つて」。

ユニコロは障害者雇用の際し、本採用の前に必ず実習を行い、そこで適性を見極める。その二週間の実習に参加することを決意した。

実習があつた七月は、繁忙期の入り口に当たる大変な時期。障害者の主な職場となるバックルームも在庫で埋まつて、作業する場所がない。「とりあえず周りの人にどうしたらいいですか、つて聞きながら少しずつ片付けていって」。無我夢中で実習期間を過ごし、この職場でやっていけそうな手応えを感じたのは、実習が終わる頃だという。「みんなでバックルームを磨いたんです。スタッフさんと話しながら作業してたんですけど、その時、ああうまくやれそうだな、つて思つて。何があつたわけじゃないんですけど、僕のことを受け入れてくれていて、つていう実感がありました」。

★親子の迷いを乗り越えて

実習終了後、ユクロ側からも入社を打診され、とんとん拍子に話が進む



★ ★
田巻君がいない店は、
考えられない

★ ★
障害者を
お地藏さんにしない

るのは、ユニクロを
展開する、株式会社ファーストリテイ
リング総務・ES推進部の井上幸司さ

★ ★
ユニクロの星は
輝き続ける

一〇時四五分。売り場の準備が終
わり、朝礼が始まる。田巻君を含め四
人の店員が店長の前に集まる。昨日の
売上、今日の目標などが店長から伝
えられると、田巻君に「サンキューカー
ド」が渡された。従業員同士がお互いに、
してくれたことを書いて感謝の意を伝
えあうこのカード、この日、田巻君は「ハン
ガーの色や出し方を教えてくれてありが
とう」というカードをもらって嬉しそう。

朝礼の終わりにいつもの「ウイスキー」
の唱和で笑顔を作って接客の準備。パツ
クルームで接客はしない田巻君だけれ
ど、本当に楽しそうに「ウイスキー」を
やっている。「いつか売り場でお客様に商
品をご説明したり、おすすめしたり。接
客をやってみたい」。夢に向かって、田巻
君、今日も笑顔で「ウイスキー」。

働くよるこびは、人とつながり続ける
よるこび。励まされ続けるよるこび。そし
て、この世界の中で「自分の居場所」を
感じるよるこび。田巻君は、今日も、明
日も、働くよるこびを噛みしめ、よるこび
を周りに振りまきながら、ユニクロ横浜都
岡店の「星」として輝き続けるだろう。

ユニクロの

星



「らいむ」の竹内広美さんと。笑いながらも手は止めない。

